村上忠順翁顕彰会報

堤小学校４年生による創作歌劇「郷土を愛す-村上忠順」の発表（撮影：酒井）

～～～～～目　　次～～～～～

	P
・ぼんやりの時間が人生の肥やし	2
・「三山日記」の旅　その一　忠順の秋葉街道を往く	3
・「江戸食文化にふれる旅」に参加して	3
・村上忠順翁をめぐる事ども	4
・遺品整理の安堵　その二	6
・堤小学校学芸会で村上忠順翁の生涯を発表	6
・平成２２年度の活動報告	8
・「忠順ありがとう大賞」について	8

村上忠順翁顕彰会報　　第２２号

編集　　村上忠順翁顕彰会事務局
発行　　平成２３年３月３０日

ぼんやりの時間が人生の肥やし

村上忠順翁顕彰会　会長　近藤光良

平成二十二年は昨年に続き日本にとって大変な年となりました。特に外交において、沖縄の米軍基地移転問題におけるアメリカとの関係、尖閣諸島沖の中国漁船と日本の海上保安庁の巡視船との衝突事件、北方四島に対するロシアの強硬姿勢など、幕末における黒船到来のような雰囲気がありました。こうした問題はこれからも継続することでしょう。日本のような小国が外交に対してどのような対応を行うか重要な場面に立たされています。

経済においても円高が進み、自動車産業に主軸を置く豊田市は相変わらず財政的に厳しい状況が続いております。

こうした中、昨年ノーベル化学賞に根岸・鈴木両博士二人の日本人が選ばれました。また、七年間宇宙をさまよっていた人工衛星「はやぶさ」が苦闘の末、彗星の微粒子を採取し帰還するという感動的な場面があり、明るいニュースとなりました。

このような社会の動きの中で、私たち「村上忠順翁顕彰会」は、例年のごとく「忠順ありがとう大賞」、女性部の西尾市「岩瀬文庫」の視察、「歴史探訪」における「三山日記」のひとつ鳳来山への訪問、新行先生による恒例の「四方樹大学」を開催いたしました。

「四方樹大学」では、江戸に旅立った忠順が、ようやく無事刈谷に帰還することができました。更に今年は、大変有難いことに、堤小学校の皆さんが、忠順翁の劇を演じてくれました。村上忠順という人物がどのような人であったか児童たちも劇を通じて知ってもらえたと思っております。

村上忠順は、新行先生の「座右記」に関する講義によると、本業であるべき医者の仕事よりも、和歌の世界の方が面白かったようで、時々仮病を使って本業を休み、和歌の世界を楽しんでいた節があるようです。和歌を通して、江戸をはじめいろいろな機会を通じて多くの歌人達と接触していたようです。また、こうした交流を通じて、当時の日本の動きを察知していたとも受け止められます。日本や刈谷藩の将来がどうなるのか敏感に受け止めていたからこそ、密かに倒幕運動を支援したと考えられます。これからの若い人たちにも是非多くの人と関わることにより、これからの社会、自分がどうあったらいいのかを考えてもらいたいものです。

今や若者たちにとって就職が厳しい時代となってしまいました。自分を追い詰め、引きこもりがちになりがちな現代です。そんなときにこそ、ぼんやりとした時間を持つことにより自分や社会を見つめ直し、これから進むべき道をじっくり見つめることが必要ではないでしょうか。若者たちに限らず、ひたすら仕事に励んできた人たちにとっても、時にはぼんやりした時間を持つことにより、これからどのように生きるか考えることが大切だと思います。

村上翁も江戸からの帰り道、多くの名所・旧跡などを訪れ、自分を見つめ、これからの社会の行く末や和歌への取り組み姿勢などを思案しつつ旅をしたようにうかがえます。時には、ぼんやり過ごす時間は現代人にとって人生の大きな肥やしになるように思えます。

皆さんも時にはゆったりと流れる時間を満喫してみてはいかがでしょうか。

「三山日記」の旅　その一
忠順の秋葉街道を往く

石川　隆之

光陰矢の如し、初回は村上忠順翁顕彰会の発足年に、二回目は二十二年ぶりに、今回は忠順さんが五泊六日の旅程の二日間を日帰りで探訪することになった。

初日に宿を取られた豊川からスタートする。豊川閣妙厳寺の静かな境内を通り二十数年ぶりに参拝をする。忠順さんは翌日も詣でている。特別な事情か、旅の安泰、世の中の泰平を祈られたのだろうか。次は、三河国総鎮守の砥鹿神社へ、車窓から変らぬ風景を眺めながら到着する。参拝を済ませ境内を散策すると大きなさざれ石が鎮座していた。前回には目に留ることがなかったので神官にお尋ねすると寄進をしていただいたとのお話でした。思いだしたのが国歌「君が代」の第三句に「さざれいしの」四句「いわおとなりて」、二句「ちよにやちよに」と結句「こけのむすまで」と呼応していて、旋律もよく歌いやすい、日本国が未来永劫に発展、繁栄していく様子を歌詞にしている。あるべき姿として改めて感じた。

さざれ石

境内の静けさと涼しさを後にして、鳳来寺山に向かう。道中、忠順さんの詠に「わがのれる馬ぞつまづく滝川の岩かどおほみうまぞつまづく」とあり、途中乗馬して旅を楽しまれたのだろう。昼食は鳳来寺山表参道脇にある食事処「雲竜荘」にて山菜民芸料理に舌つづみ、美味であった。忠順さんも鮎料理か、精進料理など召上られたのではないかと想像する。満腹を感じながら坂道を下ると山頭火の句碑「たゝずめば山気しんしんとせまる」を詠みながら次の鳳来寺へ、健脚でないので本堂へは行かず鳳来山東照宮にて参拝する。

今回の探訪の前に下見をなされた結果であろう近藤銈司さんの解説で「三山日記」の三山はマウンティンでなく仏寺の称号としての山が妥当であろうと結んだ。顕彰の一つの成果ではなかろうか。次回その二が楽しみになってきた。その一は終りに近づく、交通事情により予定していた時間が過ぎてしまった。秋の鳳来寺山の紅葉を楽しみに帰路につく。

終りに近藤会長、事務局、女性部の皆さん、お世話になりました。楽しい顕彰が出きましたこと心からお礼申し上げます。

木かげよるバス待ちながら遠き日日
思いださせる　三山日記
（隆之）

「江戸食文化にふれる旅」に参加して

森　順子

私はこの旅で豊田出身の名士、村上忠順翁を知り、そして地元の施設を巡り、江戸の食を愉しませていただきました。

はじめにトヨタ鞍ヶ池記念会館を訪れ、トヨタ発展のルーツとなった「無停止抒換式豊田自動織機」の実演を見学しました。これはシャトルと呼ばれる〝抒（ひ）〟という器具に一瞬で糸を通す技術で、画期的な発明に感心しました。

次に訪れた西尾市「岩瀬文庫」では、以前から実物を見たいと思っていた百万塔とその中に収められた陀羅尼経を拝見出来ました。百万塔は千二百年程前の奈良時代の木製で、称徳天皇が追福修繕のために日本全国の一宮に納めたものです。偶然にも身近な所で目にすることができ感激しました。塔は想像していたよりも大きく（高さ約二十一、底部直径約十センチ）、お経は印刷されたもので小さく短めの内容で、印刷物としては現存する日本最古のとても貴重なものです。

お昼は、江戸時代の食事の献立を出していただいた日本料理の「登味田」で、四十種類以上の材料を使い手のこんだ料理をいただきました。

例えば、お刺身は鰹だし、酒などの特製だれをつけていただいたり、天ぷらはタタミイワシを用いたもので、そのままでもおいしくいただけました。煮物の真薯は、ほうれん草と白身魚を使い湯葉を添えたもの。鯛の焼き物は、ごま風味の味噌床につけたもの。イカは抹茶をまぶして焼いたものなど、どれも素材を生かした上品な味で見た目も美しい料理でした。デザートは、上用饅頭が提供されました。その時代、砂糖は高価なもので塩味が勝った味かなと思いましたが、意外にも黒砂糖の風味豊かな味わい深いものでした。

そして、製茶工場のあいやで工場

見学をさせていただきました。西尾が日本一のお茶の生産量を誇り、全国の四十％を占めると聞いて驚きました。

最後に訪れた丈山苑は、水無月ということもあって青葉の美しい庭園でした。嘯月楼からの眺めは風情があり、丈山はここから月を眺め月に吟じたんだろうなと風流の世界に浸り、心が落ちつきました。

今回訪れた所すべて、そして車中でも多くのことを学ばせていただき、又楽しむことができて実り多い旅でした。企画・運営をされた関係者の皆様、そしてご一緒に旅をして下さった皆様、本当にありがとうございました。感謝。

岩瀬文庫にて

村上忠順翁をめぐる事ども

東京都立小岩高等学校教諭
学術博士　中澤伸弘

忠順翁に関する幾つかの話題を提供しよう。

一つは忠順翁の『標註古事記』についてである。『標註古事記』三冊は、古事記の注釈書としては詳細を究めたもので、翁の細かな筆遣ひと学識の深さとを、今日でも見る者をして思はせる著作である。私の手元の本によると、明治七年一月に「深見藤十郎蔵版」とあり、三河国八丁邨の近藤巴太郎　新堀邨深見藤吉の連名で刊行されてゐる。深見家は木綿商で忠順翁の女年之（とし）の嫁ぎ先でもあり、また門人でもあつた家である。刊行は書店ではなく私家版であつたことがわかる。

版本はその刷り立てに版木が必要であり、また逆を言へば版木があれば何時でも刷り立てが出来るものであつた。そのため版木は保管には場所をとるものの、価値あるものとして扱はれ、質に入れられたり、売買されたりもしたのであつた。翁の『標註古事記』は明治初年に刊行され、その後も何度か刷り立てられたのであらうが、版木はその後深見家の手を離れたやうである。

『三重縣神職會報』の五一七号（大正十三年九月）に神社に寄贈をした者に感謝状を贈つた記事が載つてゐるが、その中に次のやうな事が書かれてゐる。（瀬戸市太田正弘氏示教）

村上忠順撰　標註古事記三冊
見積価格　金拾圓
同上　版木　百十八枚
同　　金六百圓
阿山郡上野町　縣社　菅原神社
大阪市安土町　石塚猪男殿

これによると大正十三年に大阪の石塚猪男氏が上野町（現伊賀市上野東町）の菅原神社に、忠順翁の『標註古事記』三冊とその版木百十八枚（合計六百十円相当の価値）を寄贈したことがわかるのである。版木百十八枚は、三冊のこの著作の丁数に符合するので間違ひはなからう。それにしてもなぜ三河の著作の版木が大阪人の手元にあつたのであらうか。またなぜ伊賀上野の菅原神社へ寄贈したのかが不明である。また現在はどのやうになつてゐるのか気になり、同神社の高田喜博宮司に問ひ合はせたところ、今日その版木は所蔵してゐない、またその当時のことは聞いてゐないとのご回答を頂いた。百十八枚もの版木は保管も大変であらうし、また現存してゐたらこれは貴重なものとなつたであらうから、残念なことであつた。それにしても『標註古事記』が十円相当、その版木の価値が当時の六百円相当であつたことも興味深い。

二つめは村上家蔵の『標註倭名類聚抄』七冊についてである。この本は、村上家に収蔵されてきたもので、『倭名類聚抄』の注釈書であることは書名からも伺へる。これはこのたびの翁の千巻舎の改修にあたり豊田市が保管することになつたものであるが、既に村上家の所蔵目録に挙げられてゐたものである。翁は『倭名類聚抄』の注釈書まで書いてゐたのか、これは新たな発見であると思つたものの、この目録に「文政十年五月端五日」とあつて不審に思つたのであつた。もしこの日付が正しいなら、これは忠順翁の著作ではない。なぜなら文政十年は翁はまだ十五歳の若さで、『倭名類聚抄』の注釈なぞ書けるものではないからである。また『倭名類聚抄』の注釈書としては狩谷掖斎の『箋注倭名類聚抄』が著名であり、此が書かれたのがこの文政十年であつたから、私はこの掖斎の『箋注倭名類聚抄』を写したものであらうと考へたのであつた。事実村上家から送られてきた写しを見て、「文政十年五月端五日　湯島　狩谷望之」とあり、甲乙比較してみると、

これは翁が『箋注倭名類聚抄』を抜き書きしたもので、特に翁の考へが書かれてゐるわけではないことが判明した。

但しこの序文は著者　源（みなもとの）順（したがふ）の伝を『箋注倭名類聚抄』の序文や『大日本史』の伝などの書をもとに翁が創作したもののやうなので次に挙げておく。

源順字具擠（江談抄）大納言定曽孫、左馬允挙子也、能属詩文、兼達和歌（歌仙伝、拾芥抄、尊卑分脈）天暦五年帝勅順及大中臣能宣清原元輔紀時文坂上望城　就昭陽舎選後撰和歌集　世謂之梨壺五人　又以藤原伊尹為撰和歌所別當（八雲御抄　拾芥抄）伊尹時為蔵人左近衛少将（公卿補佐）帝手書勅旨賜之　順行制詞　中有雄剣在腰抜則秋霜三尺　雌黄自口吟又寒玉一声之句時人称焉（本朝文粋　和漢朗詠集）第進志（本朝文粋）任勘解由判官　応和天元間歴民部大丞下総権守和泉守遷能登守（歌仙伝）官途沈滞憂鬱間見文辞　嘗作河原院賦　刺源融奢侈曰　彊呉滅兮有荊棘姑蘇台之露滚々暴秦衰兮無虎狼咸陽宮之烟片々（本朝文粋　和漢朗詠集）　又嘗為勤子内親王著和名類聚鈔十巻（據本書古本序）雅愛橘在列文章輯為七巻作序傳世（本朝文粋）又與能宣等奉勅作萬葉集訓点（詞林材要抄）永観元年卒年七十三（歌仙伝、尊卑分脈）（鈔大日本史第二百十七巻文学列伝之文代序文）　参河　村上忠順

その三は長澤伴雄編『詠史歌集』二編、また同編『類題和歌鴨川集』六編に寄せた、忠順翁の歌稿についてである。

『詠史歌集』は歴史上の人物を題にして詠んだ歌を纏めたもので、その初編は嘉永六年に刊行されてゐる。伴雄はその第二編を編むことを計画したのである。また『類題和歌鴨川集』は伴雄の手により第五編（嘉永七年）まで刊行され、翁の歌は嘉永五年刊の第四編以降に採られてゐる。伴雄はこの『詠史歌集』二編、『類題和歌鴨川集』六編に忠順の歌を載せるべく、依頼したやうでそれを受けて翁は歌稿を送つたのであつた。しかし『詠史歌集』二編は稿本は完成したものの、残念ながら伴雄の死によつてこの刊行は中断し、これが世に出たのは約六十年以上を経た大正二年になつてのことであり、また『類題和歌鴨川集』六編は遂に編まれることなく空しくなつたのである。

伴雄の所蔵本は長澤家の手を離れ、戦前に台北帝国大学に収まり、終戦後もそのまま同大学の図書館に長澤文庫として所蔵されてゐるが、先年に鳥居ふみ女史が調査をされて簡易な目録が刊行された程度でその詳細は不明のままであつた。今回鹿児島大学の亀井准教授が、この悉皆調査をされ、その中に忠順の手になる『詠史歌集』二編用と『類題和歌鴨川集』六編用の歌稿があることが判明し、両著の編纂にあたつての忠順と伴雄の関係がなほ明らかとなつたのである。

『詠史歌集』二編の稿は表紙に「詠藻」（忠順筆）また朱で「二編スム」と伴雄の筆によつて編纂終了の覚え書きが書かれてゐる。本文十六丁で酒井利亮の歌と共に纏められてゐる。活字で刊行された二編の歌と比較するとその採否がわかるものである。また『類題和歌鴨川集』六編の稿本は「愚考詠草」（四十四丁）と題し、表紙に「鴨六」の印が押されてゐるところから、その編纂用にされたことがわかる。これも忠順と利亮の歌稿が合綴されてゐるものである。

忠順と伴雄の関係は嘉永初年から始まるのであらう。長澤文庫には伴雄の日記があり、この解明によつて翁と伴雄の関係が更に判明することであらう。この調査には私も誘はれてゐるので委細は今後わかり次第ご報告したい。

四つ目は磯丸に関してのことである。忠順翁は若年の頃に伊良湖の磯丸に歌を習つてゐる。文政九年、磯丸が添削した十五歳の時の翁の歌稿が村上家に伝存してゐる。勿論これ以外にも磯丸との交流があつたのではないかと思ふ。『新修磯丸全集』（昭和十四年）を見ると、多くの歌人との歌の遣り取りがあつたことが伺へるが、その中に「思順」と言ふ歌人との歌の遣り取りが書かれてゐて、三首の歌があるが、この「思順」は「忠順」の書き違へではなからうか。尤も「思順」と言ふ歌人がゐてもをかしくはないが、気にかかつてゐる。

この三首は磯丸の文政十一年の『冬の詠草』に二首、『磯の玉藻』（年不詳）に一首あるもので、何れも磯丸が来訪したことを詠んだものである。文政十一年は翁は十七歳、先の歌稿から二年後なので時代的には合ふこととなるがいかがであらうか。

『冬の詠草』

磯丸君の訪ひ給ふをよろこびて

かくふかき心ありてや降雪も

いとはず君は尋ね来つらむ

月花のおりもさびしき宿なれど

ゆきに長閑けき君が言の葉

『磯の玉藻』
あら磯の波もいとはず敷島の
道をわけ来る君ぞたのしき
雪の降る日に忠順の許を訪うた磯丸を心に描くのである。
以上翁に関する事どもを四点挙げて置く。

遺品整理の安堵　其の二

村上家当主　村上　斎

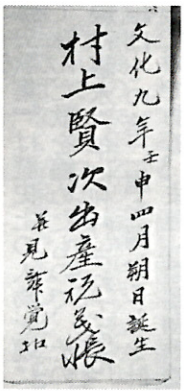
日陰で、ほこりを落としながら一点ずつ、一時的な虫干しを始めたがどうしても、中味が気掛かりで、搬出を後回しにし、確認する。今までに見つかっていない、もう無いであろうと、諦めていた生誕記録、香典帳、愛用品等々が、続々と出てきた。夢でも見ているのではないかと、錯覚してしまった。とにかくうれしかった。すぐ墓前に、分類整理の報告をした。

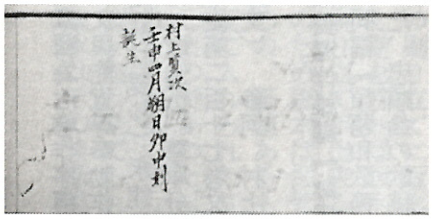
忠順遺品がほとんどで、眼鏡、竹物差し、メモ、硯、墨、細筆、書簡等の書き損じ、包み紙（裏面の再利用）、水引（綴じ紐用）等々があり、箱の姿を見ると、忠順が日常使っていたそのままであったと思われる。命が終り、急きょ部屋の片付けに入り、手当り次第に段積みにし、土蔵へと運び入れたことが想像出来る。長い歳月であったことが、状態からでも伺うことが出来た。その後の移動もしてなく、上段はほこり等で真っ黒、一枚持ち上げれば真っ白で、新品同様であった。もっと確認したかったが、搬出を中断するわけにはいかない、続いて出すことにした。搬出のために、何度往復しただろう。そして、やっと一区画分を出し終えることが出来た。

では、新たに出てきた、出産記録、香典帳の順に、その一部を見ていこう。

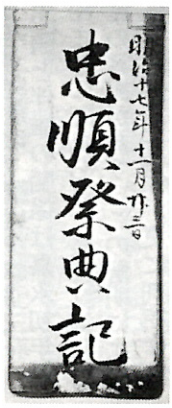
出産記録

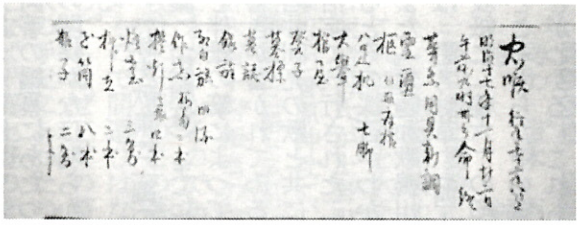
忠順（幼名、賢次、忠幹の次男）

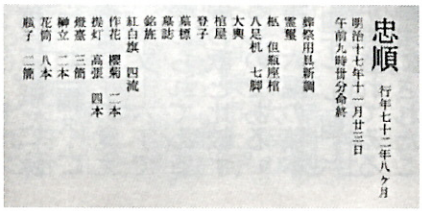




香典帳







すべてのご紹介は、出来ませんが、千巻舎（公開は未定）で展示し、顕彰して下さることを、切に希望しています。

蔵内には、まだ少し眠っているかもしれません。早い時期に、陽の目を見せてやりたい、これが、忠順供養と信じつつ、筆を置きます。

堤小学校学芸会で
村上忠順翁の生涯を発表

堤小学校の学芸会（十一月十三日）で、村上忠順翁の生涯の創作歌劇を四年生の児童百七十五名が演じてくれました。四年生の主任西澤裕樹先生に、今回の学芸会について四つの質問をし、回答をいただきました。また、学芸会で、忠順翁の創作歌劇を演じた四年生の児童が感想を書いてくれたので、一部を紹介します。

西澤先生への質問と回答

質問①　今回、村上忠順翁を題材にしたのはなぜですか。

西澤先生　村上忠順さんを題材にしたのは、社会科の学習で「郷土に伝わるねがい」の中で郷土を愛した偉人として学習したことと、昨年の学芸会で四年生が枝下用水をひくことに尽力した西澤眞蔵さんを演じたことから次は忠順さんをという地域の方の要望もあったので題材にしました。児童はもちろん多くの人に村上忠順さんという人物を知ってもらうことをねらいに学芸会で取り組みました。

質問②　困ったことはありましたか。

西澤先生　台本作りは基本的に学校にある年表を参考に作っていったのですが、そこからはわからない、独自のエピソードなどがあると劇にしやすかったなと思いました。直前に近藤銈司さんにお話していただいた内容は大変よくわかるお話だったので、もう少し早く聞くことができたら印象に残るエピソードも組み込めたかと感じています。

質問③　児童の反応はどうでしたか。

西澤先生　名前は知っているのだけれども忠順さんがどんな人物かよくわからなかったので学芸会で演じてよかった。また、多くの人に知ってもらえてよかったという子が多かったようです。

質問④　終わった感想を教えて下さい。

西澤先生　やはり村上忠順さんのことがよくわかった。学芸会を観た周りの方の反応からも学芸会で取り上げてみてよかったと感じています。事前学習を深めていけばさらに忠順さんがいかに地元を愛していたか努力家だったかなど多くの方に知ってもらえると思います。「忠順ありがとう大賞」への参加率も増えたのではないかと思います。以前より身近な郷土の偉人に親しみを感じてくれたと思います。

学芸会を終えた児童の感想

深谷　はづき

初めは、忠順さんのこと、あまり知らなくて、学芸会で忠順さんのことをやってよくわかった。

歌はかえ歌で、忠順さんありがとうといっているみたいで、自分もなぜかうれしい気持ちになるし、天国にいる忠順さんもうれしいだろう。学芸会が終わり、帰ってからみんながおもしろいよといってくれてがんばったかいがあったかな。学芸会が終わってから、私は「忠順ありがとう大賞」におうぼしました。それは、お姉ちゃんにありがとうという気持ちを書きました。自分でも上手に書けたと思いました。忠順さんありがとう。

長谷川　芽紅

忠順さんのすごいなと思ったところは、とても努力するところです。一人前の医者になるためにたくさん本を読んでいたところが努力をしているなと思えた場面です。

最初は忠順さんがなぜ有名になったか、どんなにえらい人か全くわからなかったけど、このげきのおかげで、忠順さんが土井様のごてん医になったことやとても努力をした人だということがわかりました。

中野　涼太

ぼくは、最初、忠順さんのことがよくわからなかった。五七五七七（和歌）のこともよくわからなかったけど、げきやコール、歌などで和歌のことや忠順さんの一生がわかった。忠順さんは昔の人気者で医者でもあって、新しい本が出たら買って、買えない本は書きうつした。それに読書は午前二時までつづいた、というのがすごいと思った。学芸会をやって、忠順さんは、昔から大切にされた人だと思った。ぼくも忠順さんのようなえらい人になって、みんなの役に立って、いろいろなことを伝えたいと思った。そのために、いろいろなことを勉強していろいろなことを覚えたい。

川下　ゆうせい

忠順さんて何かのおえらいさんだと思ってたけど、ほんとうはおえらいさんでもなくて、ごてん医さんでした。でもおえらいさん以上に勉強が好きな人で世の中のためにいろんなことをして、みんなに愛されていたから、今でもみんなに「忠順さん」と呼ばれていると思います。だからぼくたちも元気でえんじられたと思います。

堤小学校　学芸会

野村　夏叶

村上忠順さんのことは、初めはあまり知っていなくて、でも、げきをしたり、短歌を書いたりしていると、忠順さんはみんなから愛されていると思いました。

いまでも「ちまきのや」に本がほぞんされているのは、それほど忠順さんの本、短歌がすごいからだと思いました。

忠順さんは、との様の所に行っては、勉強もして、とても勉強家だなと思って、わたしにはとてもできないと思いました。

清水　梨理佳

村上忠順さんってどんな人なのかな？そう思っていました。私は、学芸会で忠順さんのことをやると聞いてびっくりしました。よく知らない人のことを学芸会でやるなんて…と。でも学芸会の練習をしているうちに忠順さんは、お医者さんでもあったんだ…みんなのために本を読んで、みんなの役に立とうと思ったんだ。そんなことがわかりました。初めは、村の人の役に立つような人など、そんなこと思っていなかったけど、学芸会でやったらいろんな人の役に立っているんだ、すごくしんらいされている人なんだと思いました。

平成二十二年度の活動報告

事務局　酒井順子

○四月二十五日
・「忠順ありがとう大賞」表彰式
・定例総会
・記念講演
　演題「冠水にあえぐ畝部と村上忠浄」
　講師　桑子和彦氏
　（郷土史研究家）

○六月十二日
・女性部研修会
　「江戸食文化にふれる旅」
　参加者四十名
（トヨタ鞍ヶ池記念館・岩瀬文庫
・日本料理　「登味田」
・株式会社　あいや・丈山苑）

○九月～十二月　第一土曜日
　計四回
　参加者延べ五十六名
・四方樹大学
　講師　新行紀一氏
　（愛知教育大学名誉教授）
　テキスト
　「村上忠順集　座右記」
　「村上忠順集　紀行編
　草分衣日記」

鳳来寺山にて

○十月十三日
・歴史探訪
　「忠順秋葉街道を往く　その一」
　参加者三十七名
（豊川稲荷・砥鹿神社・雲竜荘
・鳳来寺）

忠順ありがとう大賞

応募期間	十一月二十三日から一月三十一日
応募総数	一四〇九首
入賞者	十七名
選者	高橋克郎先生

入賞者の一部の方の作品と高橋先生の講評を紹介します。入賞者全員の作品は別紙をご覧下さい。

○豊田市長賞　（小学校の部）
堤小二年　田中りこ

おかあさん
いってきますと　ふりむくと
にこにこえがお　わたしもえがお

※早朝の登校時、母子の美しい情景が明るく詠まれていて感心した。特に「えがお」の繰り返しが良い。

○会長賞　金賞
堤小四年　伊藤茉央

お父さん
毎日仕事　ありがとう
家族をまもる　大きなからだ

※実際に大きな体の父親であろうが、信頼と感謝の大きさでもある。本当にお父さんありがとうである。

編集後記

本年度は、大変嬉しいことに、堤小学校の学芸会で忠順翁の生涯の創作歌劇を演じてもらえました。四年生の先生方の努力と、児童の皆さんの熱演で、保護者の方々や地域の方々に忠順翁について知ってもらえたと思います。

また、「忠順ありがとう大賞」では、高橋克郎先生が選者を務めて下さいました。高橋先生は、俳句会「松籟」を主宰されています。お忙しい中、入賞者に講評をいただけ本当にありがたく思います。

本年度もこの会報を発行することができ、ご協力いただいた皆様に心より感謝しています。

（事務局　酒井）